

北広島市立学校適正規模・適正配置について

～ 小規模化する小学校について ～



新築中の西部小学校

管理部教育施策推進担当

北広島市立学校適正規模・適正配置について

～ 小規模化する小学校について ～

1	適正規模・適正配置を検討する背景	1
	1) 児童・生徒数の推移	1
	2) 北広島団地内の児童・生徒数の推移	2
	3) 児童・生徒数の増加傾向にある地区	3
2	学校規模の状況について	4
	1) 学級数の推移	4
	2) 北広島団地内の小・中学校の学級数	5
	3) 学校別学級数の推移	6
3	今後の児童・生徒数などについて	7
	1) 児童・生徒数の推計	7
	2) 学級数の推計	8
	3) 小学校の学校別学級数の推計	9
4	学校の小規模化の問題点	10
5	諮問内容	11

北広島市立学校適正規模・適正配置について

～ 小規模化する小学校について ～

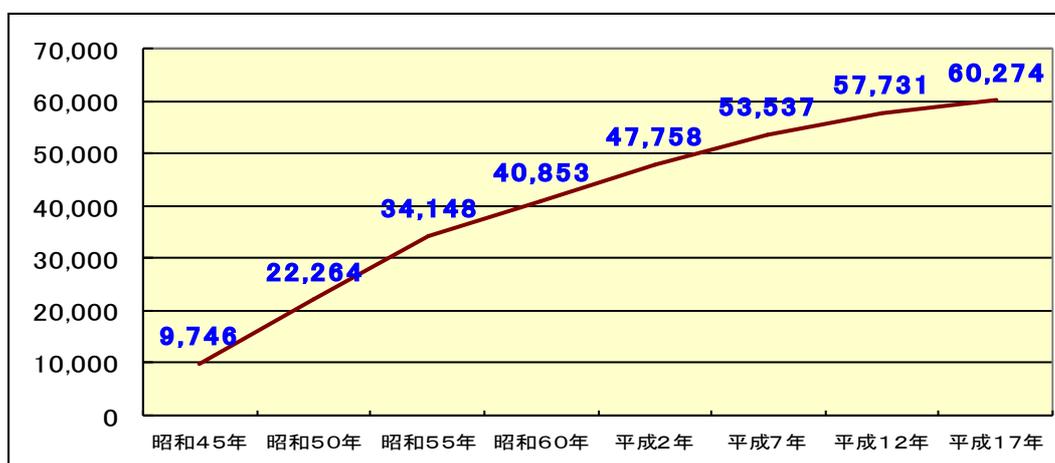
1 適正規模・適正配置を検討する背景

北広島市は、昭和43年の道営北広島団地の造成決定を契機に、北海道住宅供給公社や民間の住宅団地の開発、市が積極的に進めてきた区画整理事業、さらには工業団地の造成などによって、『自然と創造の調和した豊かな都市』を目指したまちづくりが進められてきました。このため人口は急増し、児童・生徒数の増加をもたらしました。

しかし、人口増加も昭和61年にマイナスを記録し、平成6年からは次第に鈍化傾向を示しています。

人口の推移

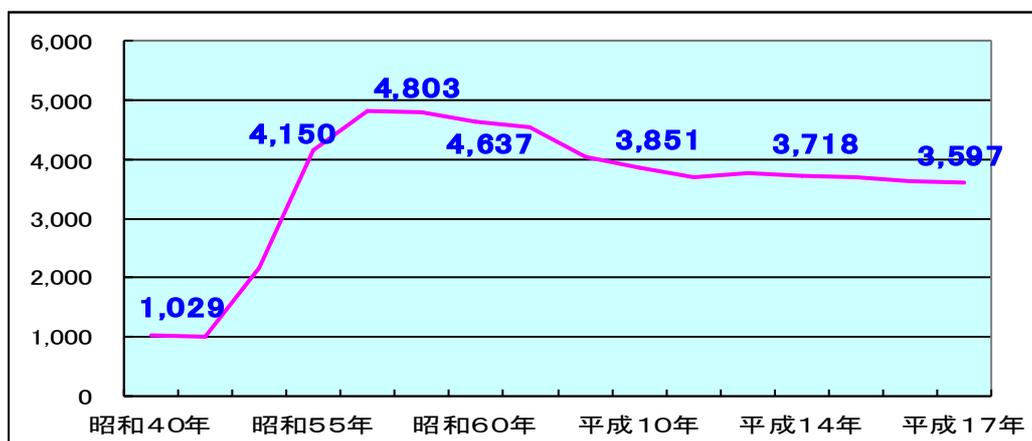
(国勢調査・平成17年度)



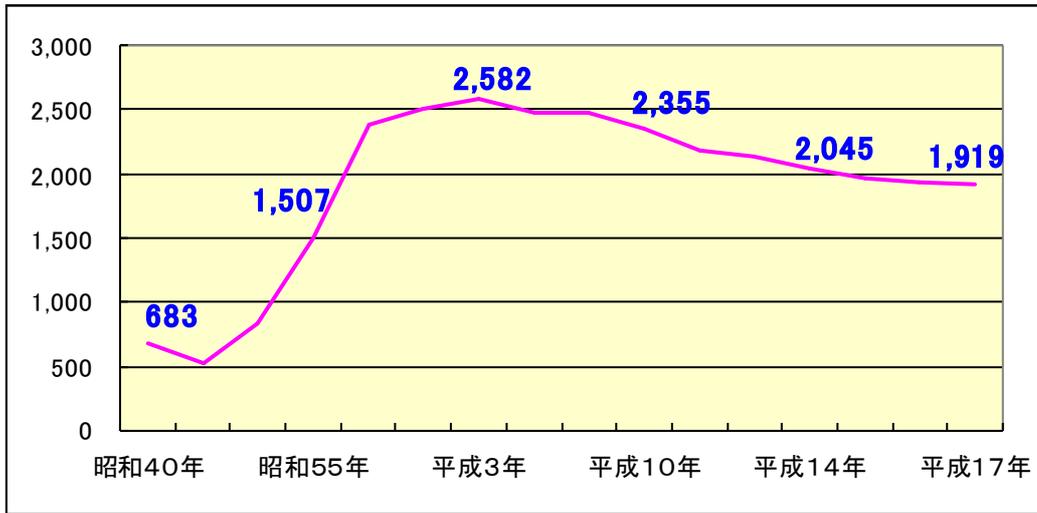
1) 児童・生徒数の推移

市立小・中学校に在籍している児童・生徒数の推移を見ると、小学校においては昭和58年度の4,803人をピークに、中学校においては平成3年度の2,582人をピークに減少に転じ、平成17年度の児童数は3,597人で、ピーク時の75%、中学校の生徒数も平成17年度1,919人で、ピーク時の74%となっています。

市内小学校の児童数の推移



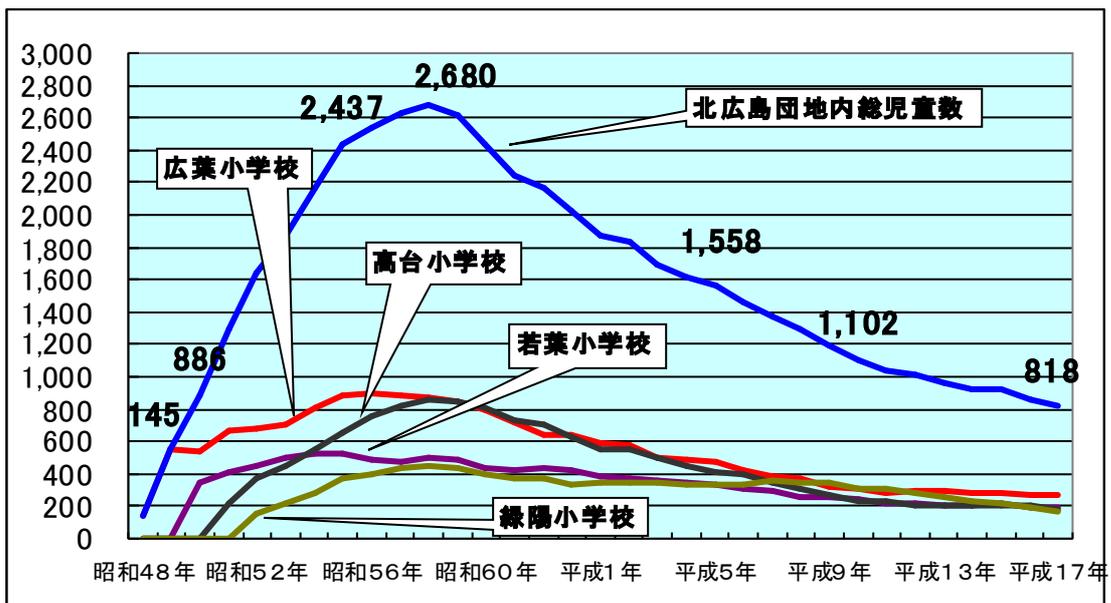
市内中学校の生徒数数の推移



2) 北広島団地内の児童・生徒数の推移

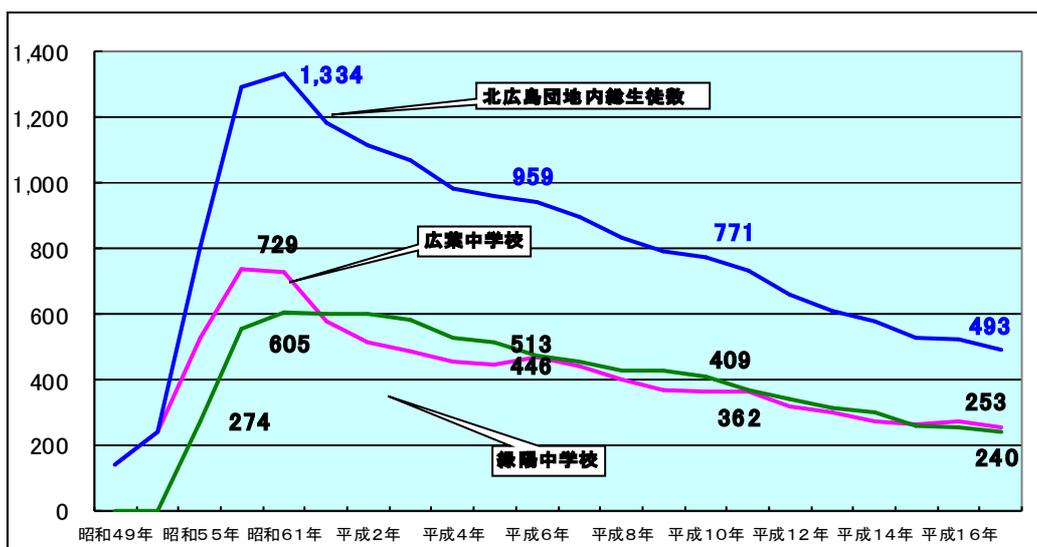
児童・生徒数の減少傾向は北広島団地内において大きく、広葉小学校では昭和56年度の897人に対し、平成17年度は265人でピーク時の30%、若葉小学校では昭和55年度の523人に対し、平成17年度は198人でピーク時の38%、高台小学校では昭和58年度の861人に対し、平成17年度は183人でピーク時の21%、緑陽小学校では同年度の447人に対し、平成17年度は172人で、ピーク時の38%となっています。また、4小学校の総児童数を見てみると、昭和58年度の2,680人に対し、平成17年度は818人でピーク時の31%となっています。

北広島団地内小学校の児童数の推移



また、中学校では、広葉中学校が昭和60年度の736人に対し、平成17年度は253人で、ピーク時の34%、緑陽中学校が昭和62年度の609人に対し、平成17年度は240人で、ピーク時の39%となっています。2中学校の総生徒数は、昭和61年のピーク時の1,334人に対し、平成17年度は493人でピーク時の37%となっています。

北広島団地内中学校の生徒数の推移

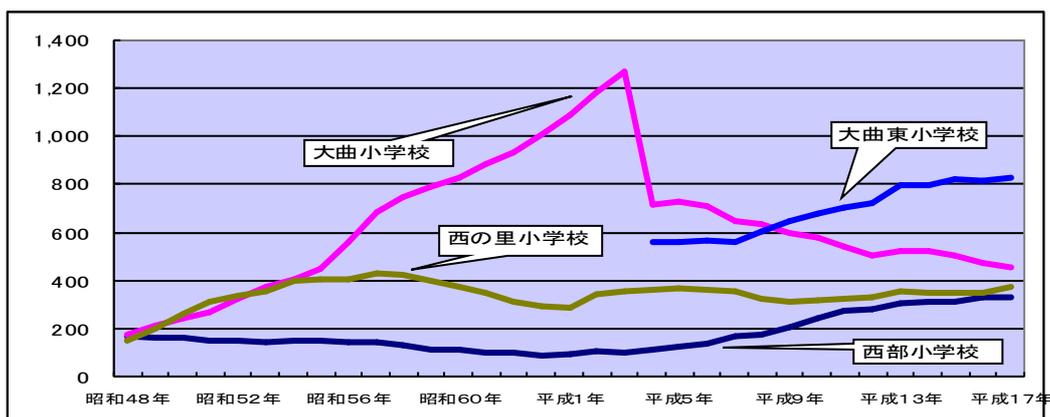


3) 児童・生徒数の増加傾向にある地区

市内全体の児童・生徒数は減少していますが、土地区画整理事業などで宅地開発が進んでいる大曲地区、西の里地区、西部地区においては児童・生徒数の増加が認められます。

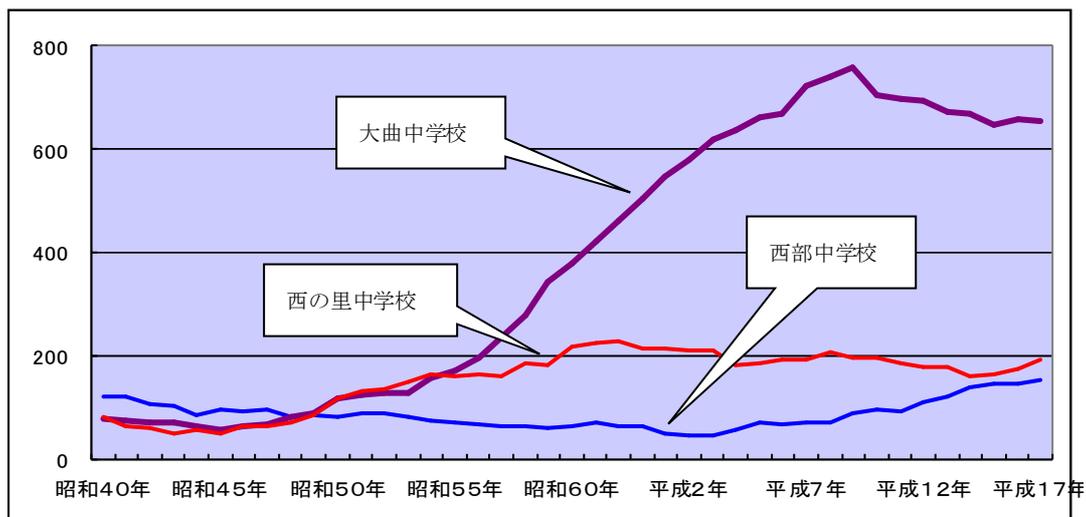
小学校においては、大曲東小学校の児童数の増加が最も多く、大曲小学校から分離・新設した平成4年度の558人に対し、平成17年度では827人と48%の増加となっています。西の里小学校では、一時減少傾向にありましたが、虹ヶ丘地区の区画整理事業による宅地造成が進み、平成9年度の314名に対し平成17年度は376名で20%の増、西部小学校でも民間宅地開発などの進展により昭和63年度の90名に対し、平成17年度は333名で3.7倍という大幅な伸びを示しています。

増加傾向にある地区の児童数の推移



中学校においては、西部中学校が平成3年度の45人対し、平成17年度は154名と3.4倍の大幅な伸びを示し、西の里中学校では平成15年度から若干の増加傾向を示していますが、昭和62年の227人に対し、平成17年度は192名とピーク時の85%となっています。また、児童数の増加が顕著な大曲東小学校を抱える大曲中学校では、平成9年度の758名に対し、平成17年度は654名でピーク時の86%となっており、同一地区内であっても小学校と中学校では異なる傾向を示しています。

増加傾向にある地区の生徒数の推移

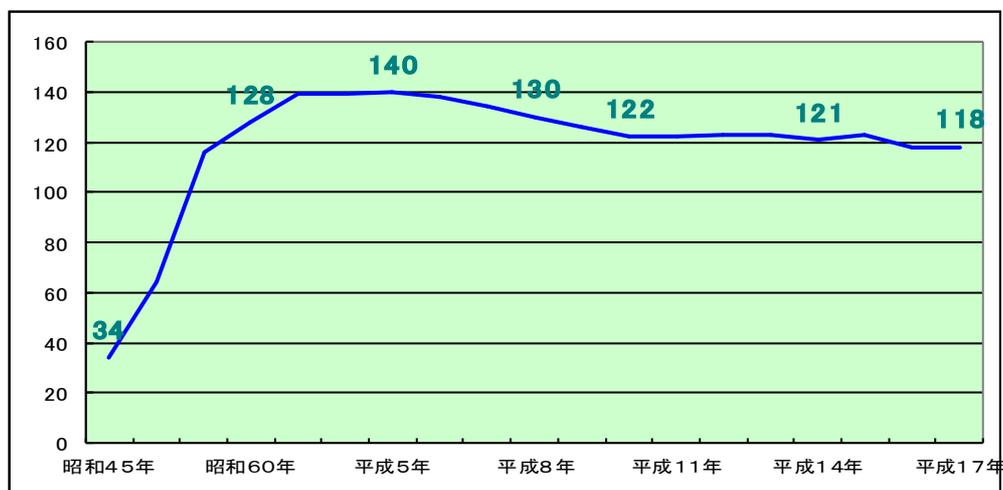


2 学校規模の状況について

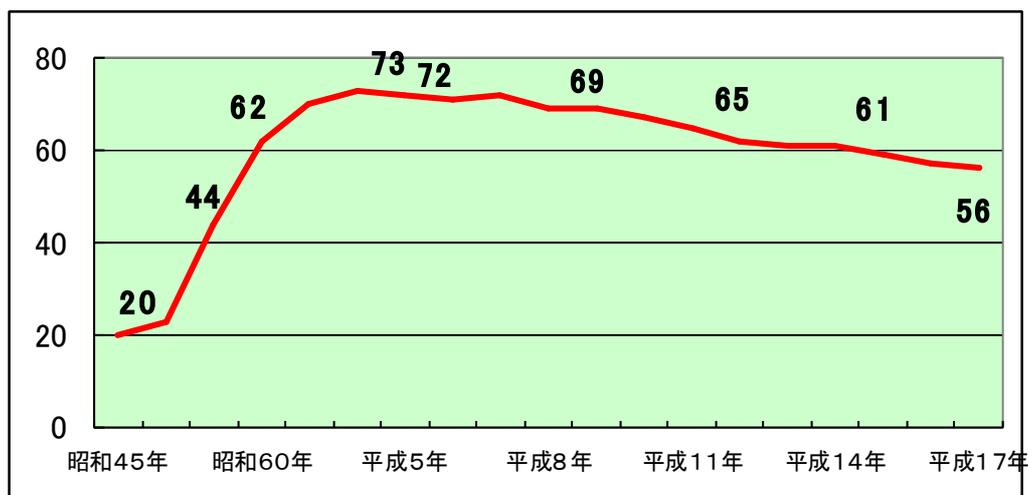
1) 学級数の推移

学校の規模を決める学級数の推移を見てみると、小学校では、平成5年度の140学級(普通学級)をピークに、平成17年度は118学級と84%まで減少しており、中学校においても、平成3年度の73学級をピークに平成17年度では56学級と77%まで減少しています。

小学校の学級数の推移



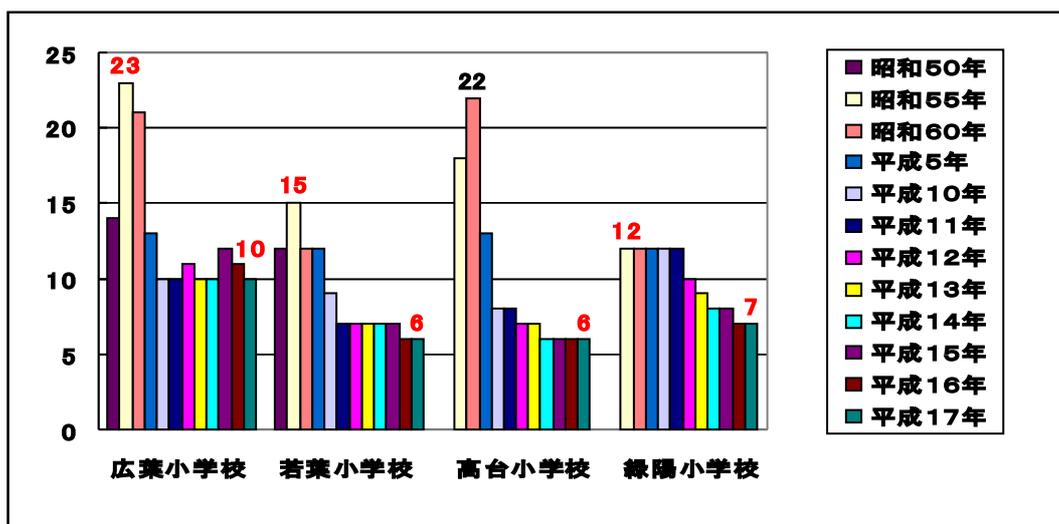
中学校の学級数の推移



2) 北広島団地内の小・中学校の学級数

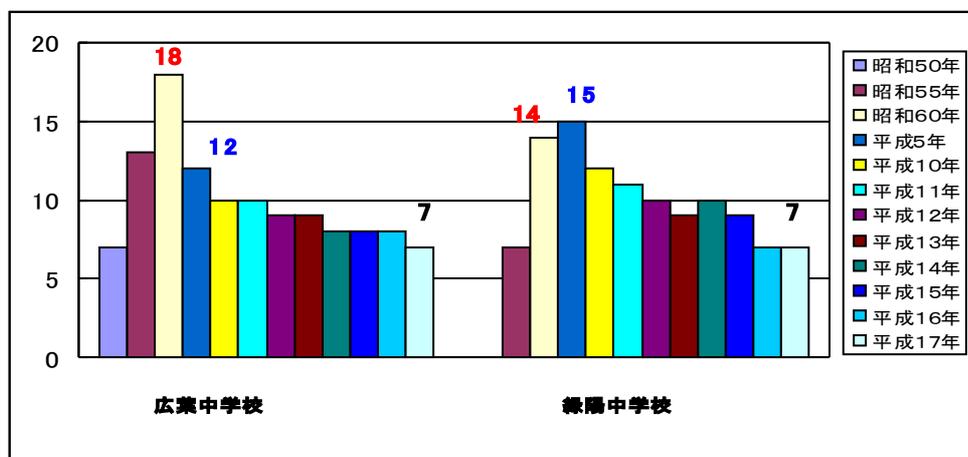
学級数の減少は、児童・生徒数の減少が激しい北広島団地内の小・中学校で大きく、広葉小学校では昭和55年度の23学級をピークに、平成17年度は10学級、若葉小学校では昭和55年度の15学級をピークに、平成17年度6学級、高台小学校では昭和59年度の23学級をピークに、平成17年度6学級、緑陽小学校では昭和58年度の13学級をピークに、平成17年度7学級となっています。

北広島団地内の小学校の学級数の推移



中学校においても北広島団地内の2中学校の学級数の減少が大きく、広葉中学校では昭和60年度の18学級をピークに、平成17年度7学級、緑陽中学校においても平成1年度の16学級をピークに、平成17年度7学級となっています。

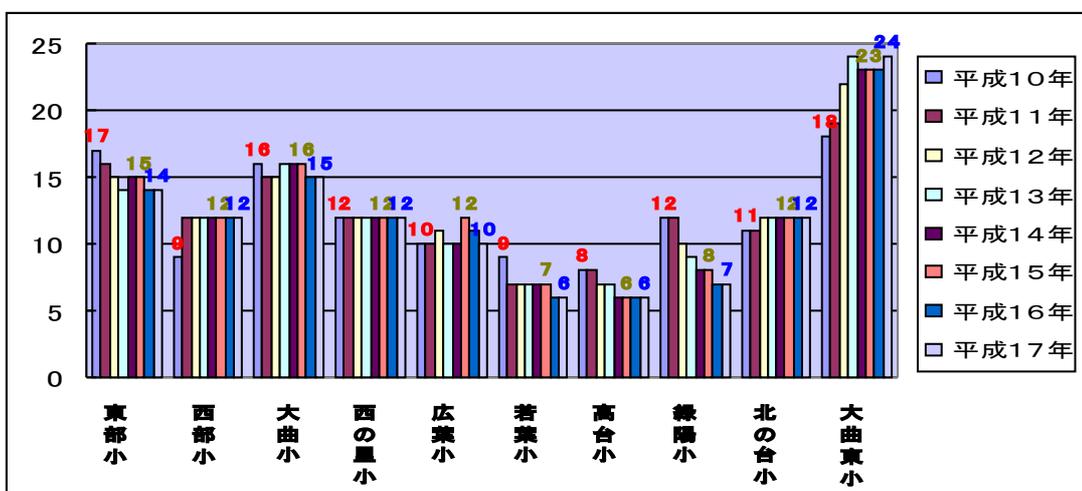
北広島団地内の中学校の学級数の推移



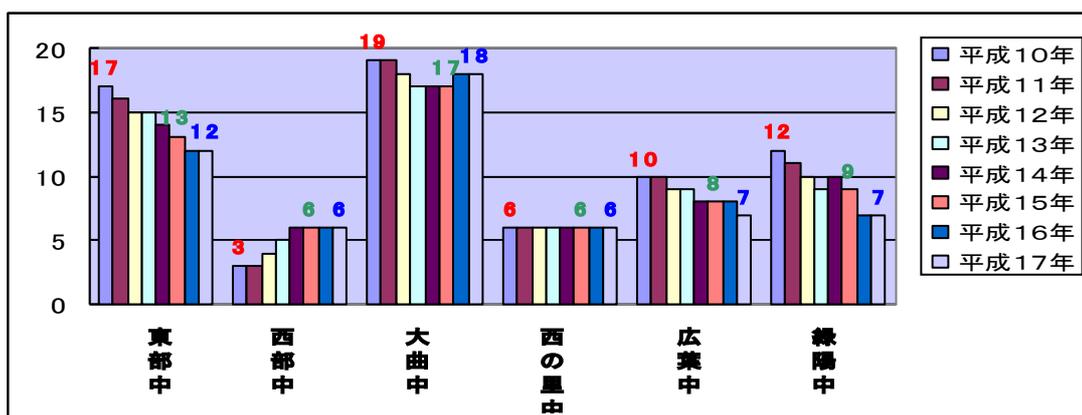
3) 学校別学級数の推移

市内の小・中学校の学級数の平成10年度以降の推移は下記のとおりとなっており、平成17年度の学級数は、小学校においては6～24学級、中学校においては6～18学級と地域間格差があります。

小学校の学級数の推移(平成10年度以降)



中学校の学級数の推移(平成10年度以降)

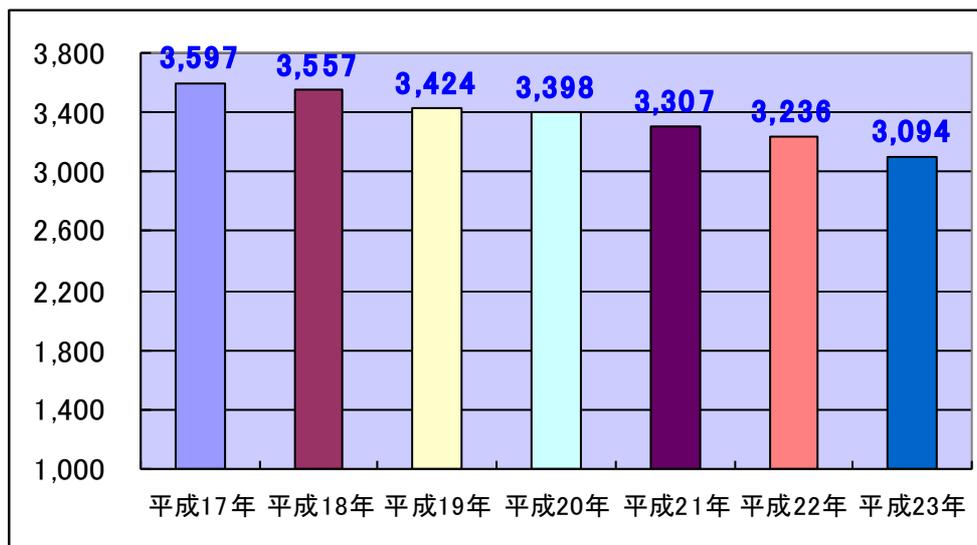


3 今後の児童・生徒数などについて

1) 児童・生徒数の推計

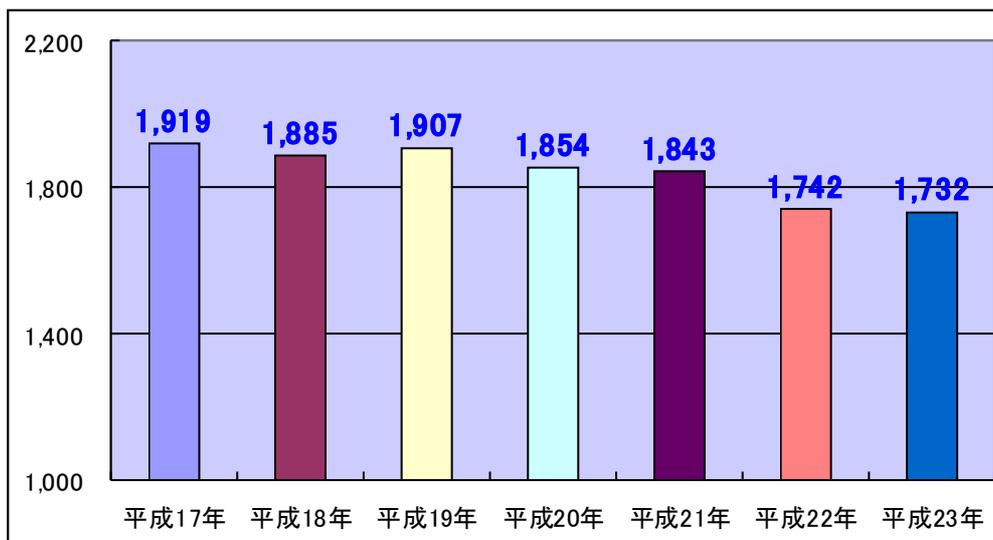
今後の児童・生徒数を平成17年4月末日の住民基本台帳を基に推計して見ると、児童数については、平成17年度の3,597人に対し、平成23年度は3,094人で86%まで減少すると予想されます。

市内の児童数の推計



また、生徒数についても平成17年度の1,919人に対し、平成23年度は1,732人と90%まで減少すると予想されます。

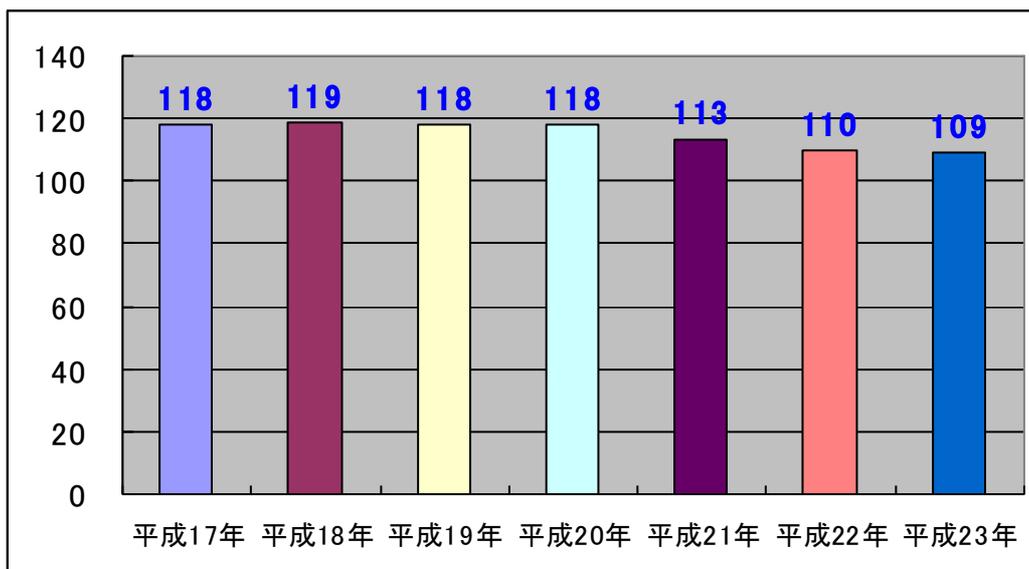
市内の生徒数の推計



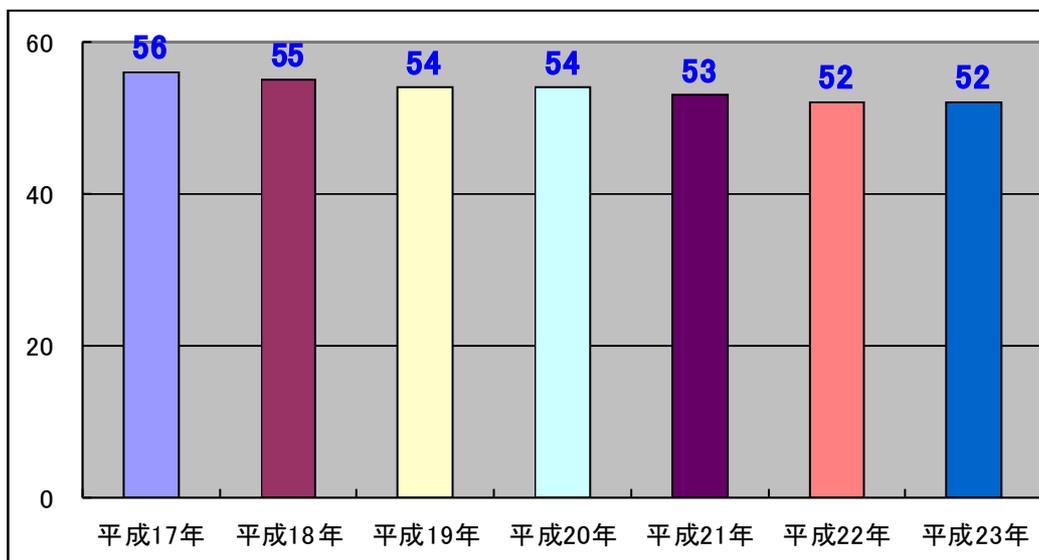
2) 学級数の推計

学級数について見て見ると、小学校においては、平成17年度の118学級に対し、平成23年度には109学級と9.2%まで減少すると予想され、中学校においても、平成17年度の56学級に対し、平成23年度には52学級と9.3%まで減少すると予想されます。

小学校の学級数の推計

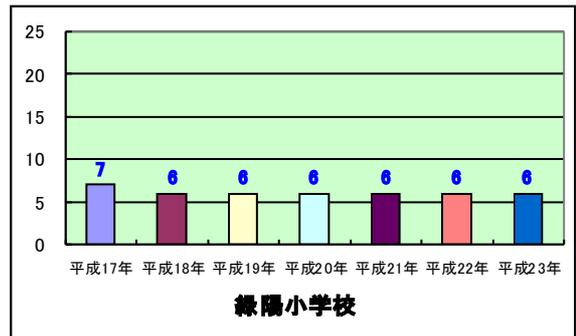
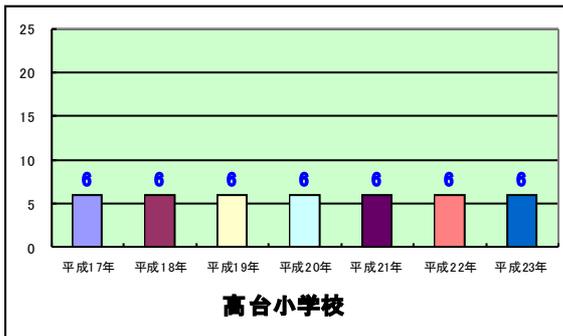
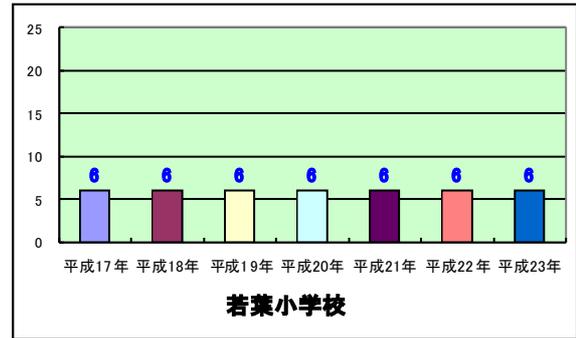
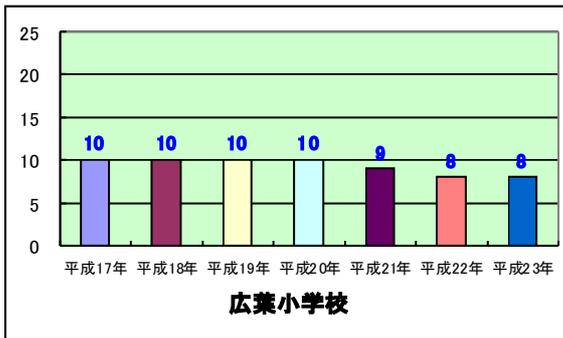
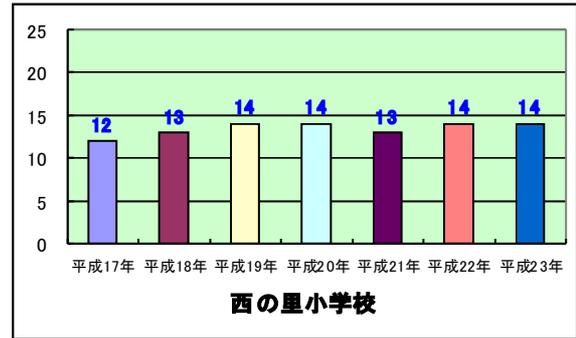
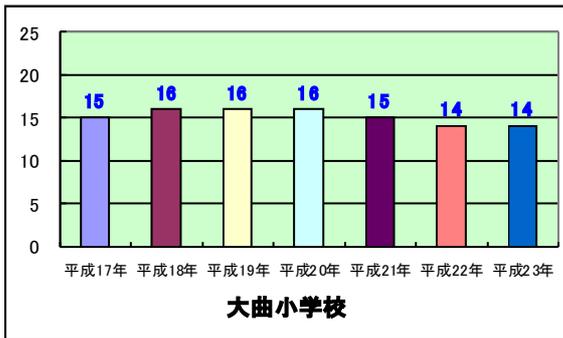
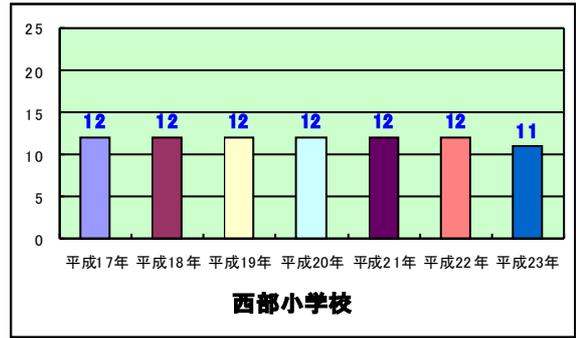
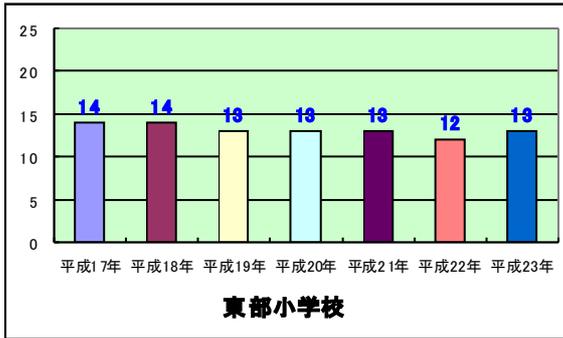


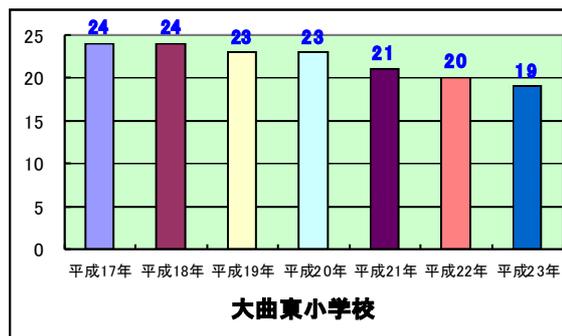
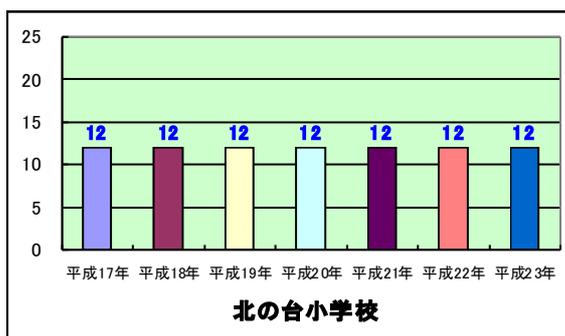
中学校の学級数の推計



3) 小学校の学校別学級数の推計

次に、今後の小学校の学級数を学校別に推計しますと、次のグラフのとおりと予想されます。北広島団地内の小学校については、広葉小学校を除き、3小学校で18年度以降6学級と推計され、現在児童数が増加している西部小学校、大曲東小学校においても将来的に学級数の減少が予想されます。(1, 2年生は35人学級で算出)





4 学校の小規模化の問題点

学校の小規模化は、目のゆきとどいた教育を進め、個性の伸長が図られる側面もありますが、小規模化すればするほど、学校教育本来の機能に大きな影響を及ぼすと言われてい

ます。学校教育は、教科学習を中心とした知識を習得させ思考力を育成していく側面と、子どもたちの社会資質の基礎を培う側面とをもっています。

学校の小規模化は、これらの側面に様々な影響を及ぼすと考えられます。子どもたちが健全に成長していくためには、学校、家庭、地域社会がそれぞれの役割を十分果たすこと

によって可能になるといえます。少子化は、家庭内での兄弟姉妹の減少を招き、また、地域社会においては、交友関係の築きにくい状況をつくりだしています。元来、子どもたちは、学校、家庭、地域社会というそれぞれの場において他の人との交流を通して、多様な経験や体験を積み重ねて成長して

いきます。しかし、年少人口が減少し、テレビゲームの普及など、子どもを取り巻く社会環境の変化に伴い、子ども同士の触れ合いが減少し、人間関係の希薄化を招いています。

こうしたことから、子どもたちの社会的資質を培う面では、家庭や地域社会以上に学校によせる期待を大きくさせています。学校は、子どもが学習する場というだけでなく、家庭と同じように子どもたちが生活を送る場でもあります。また、地域の学習センターという役割を果たすところでもあり、このことを念頭におきながら、学校規模の問題を検討していくことが重要と考えます。

当教育委員会では、地域の教育機関としての学校の役割重視の理論に一定の配慮をしながら、子どもたちの人間的成長発達にとって何が一番望ましいのかということを検討していかなければならないと考えています。

5 諮問内容

学校教育法施行規則第17条では、「小学校の学級数は、十二学級以上十八学級以下を標準とする。ただし、土地の状況その他により特別の事情のあるときは、この限りでない。」と規定しています。

また、文部省助成課資料『これからの学校施設づくり』のなかで、学校の基本的条件を充たすための指標とし学校規模を学級数別につきのとおり分類し、12学級以上18学級以下を適正規模としています。

学級数による学校規模の分類

学校規模	過小規模	小規模	統合の場合の適正規模		大規模	過大規模
			適正規模	-----		
学級数	1～5	6～11	12～18	19～24	25～30	31以上

(昭和59年 文部省助成課資料『これからの学校施設づくり』資料より)

当市では児童・生徒数の減少に伴い学級数の減少が続いており、特に、北広島団地内の小学校の小規模化が進んでいます。

大曲東小学校や西部小学校では、現在、児童数が増加しておりますが、少子化の影響もあり将来的には学級数の減少が予想されています。

こうした状況を勘案しつつ、小学校の学級数の適正規模を検討した上で、適正配置について検討していただきたく諮問するものであります。